
EXTRA History(FATE EXTRA+**真恋姫 無双**)

Dns

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

EXTRA History (FATE EXTRA+真恋姫
無双)

【Nコード】

N6992U

【作者名】

Dns

【あらすじ】

ムーンセルにおける聖杯戦争を勝ち抜いたものの、不正なデータであったため願いを叶えると同時に分解されるはずだったマスタークジヨウフミノ。しかし最後かと思いい目を開ければそこには使りになる相棒と、見知らぬ大地があった。
処女作です。至らぬところもあるかと思いますが よろしくおねがいします。

a c t · 0 w a k e u p (前書き)

F a t e E X T R A のネタバレがあります。

a c t . 0 w a k e u p

自分が少しずつ分解されるのを感じる 無限の知識の、否情報の海に還るまで後少し。

願いはすでに入力した。後は私が還るのみ。彼女の声はもう聞こえない。私の最高のパートナー。

消える前にもう少し話したかった。違う、もっと一緒に過ごしたい。

まだ、死にたくない。

「お・・・く・・・」

声が聞こえる。まだ、消えてない？目は開けられない。

「お・・・い。」

聞 きおぼえがある。いやまで、何故聞こえる？ その疑問と共に目が開く。

「よかつた、いきなりデッドエンドなんてシャレになりませんもん」

目に飛び込んできたのは心底ほっとしたようすの女性。その頭にはキツネの耳、着崩した紺色の着物。

「タマモ？ここは」

「わかりません、確か私たちは」

言われなくてもわかっている。ムーンセルにおける聖杯戦争に勝ち残った私たちは願いを叶えそして不正なデータとして分解されたハズなのに。そう私たちはデータ。

「でも、ちゃんと受肉してますよ、私たち」
そう、間違いなく受肉している。聞こえてくる鼓動が証明している。

それに此処はいつたい？周りはただっ広い荒野、遠くに山は見えるが何かはわからない。

「ご主人様、ムーンセルの知識は使えないんですか？」

タマモの問いに

「ほとんど無くなってるみたい」

「ほとんど？」

「そもそも全知なんて人間にはムリだもん。よほど縁があった知識じゃないと覚えてもらえないの」

「話ふつといてなんですけど、ムーンセルの知識はどうやって認識してるんですか」

「うーん、なんと言うか知らない知識があるって感じかな」

そう言いつつ頭のなかを確認してみる。

「んー、いくつかの礼装は．．．とりこんでる？」

そう、正確には私の魔術回路にとりこまれていた。もっと正確には、

「能力になってるみたい」

「何が使えるんですか？」

「治癒と強化、後は、ガンド」

「へー、ってそれだけ？」

「そうみたい、他にもいくつがあるけど今の私には使えないみたい」

とはいえガンドがつかえるのは有り難い。か弱い女の子である私にとっては身を守る手段がひとつようだ。特に

「それにしてもここはどこなんですかねー」

ここがどこか、少なくともムーンセルではないし、地球でもなさそうだ。いや、地球だとは思うが多分時代が違うというのが正解だ
と思う。

「そーですね、空気中のマナが桁ちがいですもん。私たちの時代で

はありませんね」

となればやることはひとつ、ぶっちゃけお腹もすいたし、

「まずは人里を探しましょ」

そうして私クジヨウフミノとそのサーヴァントタマモは歩き出す。

この世界がどうであれ生き抜くそう決めたから、私たちはそのために血で汚れてきたのだから。

a c t 1 p e a c e w o r k (前書き)

いきなりノリが軽くなりますが気にせずにおねがいします

「平和だわー」

ガシャガシャガシャ ガシャ

「平和ですな〜」

ガシャガシャガシャガシャ

私たちは平和を満期している。 皿洗いしながら

何でこうなったのか、お金がないからだ。

- 30分前 -

「お腹好いたね」

「ええ」

あの後三時間かけてようやく人里を発見した私たち。そして食堂らしきものを見つけたのだが、

「電子マネー…」

「使えるとでも」

訳がない、家も人の格好もどう見ても中世以前の中国のものだ。

これで端末で払おうもんなら速効で食い逃げにされかねない。でもお腹すいたし、一か八か交渉してみよう。そう思い店に入った。

- 現在 -

というわけで、食べたぶんを皿洗いしてくればよいとのことまで今に至る。

「皿洗いでご飯代が稼げるなんて、素晴らしいな〜」

なんせムーンスセルでは危険な攻性プログラムと戦ってお金を得ていたのだ。

「なんか大変だったみたいね〜」

店主のおばさんが話しかけてきた。ほんとにこの人はいい人だ。見ず知らずの人にここまでしてくれるなんて。

「何いってんだい、困ったときはお互い様だし最初から働くっていつてんだ断りゃしないよ」

タモも袖で涙を隠すようなしぐさ（当然ないてはいないが）をして
「私も人の義理人情に感動しておりますでいつている。」

「ま、さつきもにたような子達がいてね」
少し気になるな、

「似たようなつて、なにがですか？」

お腹が好いてて忘れていたが私はともかく、タマモの姿にあまり人が反応してないのだ。いくら中世以前の中国、いやそうでなくても狐の耳としっぽをくつつけた女の子。注目されないはずがない。じゃあねさつきの似たような人つて？

「いやその子じゃなくてあんた」

そっくりおばちゃん指差したのは、私だった。

「はい？」

どゆこと？わたしににている？なにが？

「男の子だったんだけどね、なんとというか服と雰囲気こそっくりなんだよ」

「どついうことですか？」

とタマモ、

「んー、なんとというか異国の人みたいな感じかな」

なるほど、日本人か。私も日本人をベースに創られたから似てるのか。まあ、私は日本人ではないが。大方この世界に迷い混んだのだろう。

「お一人だったのですか？」

「いや、可愛らしい女の子が三人いたねえ、確か一人は関羽ちゃんつて名乗ってたかな？」

……………はい？イマナンテ？

「そうそう、後張飛ちゃんと劉備ちゃんよ、たしか」

「ねえ、タマモ。今私なんかとんでもないこと聞いた気がするんだけど」

「えと、わたしの耳は残念ながら正常ですよ」

どうやら私たちはとんでもないところに来たようだ（棒読み）

ってちゃんとしてねマジですか!?!?

a c t 1 p e a c e w o r k (後書き)

早速反響がありました。ありがとうございます。更新はかなり遅くなるかとおもいますが気長に見てください。次回は恋姫キャラ出します。意見、感想 待っています。

act・2 girl meets…(前書き)

ついに戦闘と恋姫キャラとの出会いです。かなり残酷な表現となっております。

「なんかもう偉いことになりましたね」

皿洗いも一段落し水汲みで仕事はおしまいと言われ川にきたわたしたち。

「ホントにまさかの展開よ。いくらなんでも三国志の世界だなんてしかも桃園三兄弟が女の子になってるだなんて。」

「名前だけ一緒、ってことはないでしょうね」

どちらかというところっちの方がうさぐさい。

「この調子だと他の英雄も女の子、とか？」

勘弁してほしい、特に呂布は本人を見てしまっている。

「あれが女の子になるなんて想像できないんだけど」

「本気で悪夢ですよ、それは」

でも、かわいいっていったし。もしかするとだいじょうぶなのかな？

「マスター現実逃避はやめましょ」

思考を読まないですよ。まだあってもいないし。

そのときだった、タマモの耳がピクンと動いたのだ。

「タマモ？」

「これは、殺気ですね。またずいぶんと多いですけど」

「方向は？」

「村の方…いえ三百メートル位手前です」

こんな小さな村を襲う理由はひとつだろう。

「山賊か…」

こくとタマモが頷く。

「さすがに油断してましたね、もう少しはやくきづけたはずなのに」

少し悔しそうに言うタマモ、そしておもむろにこちらを見て、

「どうします？」

と、聞いてきた。その目は幻灯機の映像を見たときのものだ。つまり、彼女は

”危険だ”と暗にいつている。私は魔術を、タマモは呪術を使える。おそらく負けはしない。しかし、殺しあいをするかどうかはわからない。そもそも私たちは99%負けるといふ状態でいつも戦ってきたのだ。だからわかる、戦えば死ぬかもしれないということ。そしてこれは逃げてもいい戦いだ。聖杯戦争ではない。

だけど、

「行くよ」

一言私は言った。そんな覚悟はとうの昔に終わっている。わたしは生き延びるために他人を殺した。でも、だからこそ助けられる人は助きたい。都合のいい贖罪だとは思う。こんなことで許されるはずもないとも思う。でもそれは動かない理由にはならない。

「では参りましょうか、ご安心を私がいるかぎりマスターには指一本触れさせません」

「知ってる」

そう、タマモは私の最高の相棒だ。だから負ける理由なんてない。その確信とともに私たちは駆け出した。

村の入り口に着くと村長らしき人が盗賊と話しているのが見える。盗賊の数はざっと200人ほど。と、タマモが報告してくる。その数相手に交渉は無駄だろう。案の定一番前にいた男が村長らしき人に斬りかかる。

「ガンド!!!」

短く叫び相手の頭を指差す。ほとんどタイムラグ無しに黒い軌跡が男の頭を貫いた。男の手から剣が落ち、ゆっくりと倒れる。痙攣する男の頭からは薄い赤の液体が流れる。

そこにいるすべての人間が、言葉無く呆然としている。そして、わ

たしは呼び掛けた

「あなたたちに質問があります」

そう言いつつ、ゆっくりと相手が気にしない速度で歩み寄る。

「な、なんだ」

あまりの出来事に、相手がついていけていないようだ。

「一つめ、みなさんは盗賊ですか？」

聞きながら距離をつめる、タマモは死角になるように呪符を用意している。

「それがどうした!!」

明らかに虚勢を張っている。さらに歩を進める。

「二つ目、今何をしようとしてましたか？」

その質問には村人が答えた。

「こいつら、食料を奪いに「だまれええええええ!!!!!!」」

「ばれたら不味いとも思ってたんですかねえ」

叫んで村人の言動を止める盗賊に小声であきれてみるタマモ。私はタマモの死角を増やすためさらに前に出る。

「では、最後にひとつ」

ここで言葉を区切った。

「退く気はありますか？」

「……や、」

すでに距離は5メートルほどこれは

「やっちまえええええ」

タマモの距離だ。私がよこにずれるとタマモがアンダースローで呪符を投げ、

「燃え尽きなさい!!」

言葉とともに炎がはしった。聖杯戦争ではひとつの目標に集中させて使っていたモノを風呂払うように使う。サーヴァントでもかなりのダメージをおうそれは盗賊を焼くのに十分だった。あつという間

に盗賊の大半が灰になる。私もガンドを連発する。乱戦になり確実性は低くなつたが、距離をつめた性で外れることはまずない。加えて相手は剣しかもつてない。もつともそこらの弓や槍なら当たらない自信はある。それは剣も同じむしろ剣だからこそ楽だ。あの最優のサーヴァントに比べれば兎戯に等しい。

タマモも次々と焼き払う、鏡は出す必要なしと判断したのか使っていない。そして彼女は返り血ひとつ浴びていない。敵はすべて焼き払っているからだ。

十五分ほどで敵はすべていなくなった、全員殺したかはわからない。おそらく何人かは逃げたのだろう。村人は、怯えているはずだ。何せ今まさに人外の力が行使されたのだ。とはいえ何も言わずにいとかえつて不気味だと思われかねない。そう思い振り返ると。

「……ありがとうございます……!!!……!!!……!!!……!!!」
と、村人全員が土下座して礼をいつてきてるのだ。タマモも面食らっている。そのときだつて、

「まてえ!!!!!!……!!!」

何事かと振り返ると、そこには圓月刀を構えこちらをにらんでいる少女がいた。その髪は艶やかな黒だつた。

「きさまらが盗賊か、」

「へ?」

我ながら間抜けな声を出してしまった、どこを見るだろうかと思つたら。周りは焼けてたり穴が開いた死体、さらに村人が土下座をしている。あ、ヤバイ?

「貴様等のような妖術師。天の御遣いにかわりこの関羽がたたつきつてくれるわ!!!!!!……!!!」

「つて話を聞いてー!!!!!!……!!!」

「もんどろむつよ!!!!!!……!!!」

ガンつと言うおとが聞こえそうな勢いで関羽(?)の頭をタマモの鏡が直撃した。

「なんですかあ〜?この脳筋女」

「大丈夫かな？かなり良い音したけど」

「どーせ、この女英霊候補ですからこの程度じゃ死にやしませんよ」
「やっぱり関羽なのかすると他のはと思っっているよ。」

「愛紗〜！」

「愛紗〜だいじょうぶか〜」

「二人とも足速いよ〜」

向こうから白い学生服を着たぱっとしない少年と、元気の良さそうな小さな女の子、それになんと無く鈍そうでおそらく天然な気がする少女が走ってきた。

「？どうしたのタマモ？」

「いえ何だか無償に潰したくなりまして」

「大丈夫だよ、いざというときはわたしがつぶすから」
何をとはあえていわないけど。

a c t . 2 g i r l m e e t s . . . (後書き)

この小説では蜀ルートを通ります。じつはEXTRAの世界とも絡ませるつもりです。ただかなりさきになるのでいつ書けることやらないやら。意見感想待ってまーす。

a c t · 3 s h a k e h a n d (前書き)

久しぶりの投稿です。やっと三姉妹+1と仲間になります。

「本当に申し訳ありません」

見事なまでの土下座をしているのは関羽。あの後村の人たちの説明もありどうにか誤解を解くことに成功したのだが。正直、こういう状態になりかなり困惑している。

「あーもう良いですよ、勘違いは誰にでもありますし」

まあ、勘違いですんでよかった。タマモではないけどいきなりデッドエンドは勘弁してほしい。

「しかし……」

「もう良いだろ愛紗、その人も良いっていつてくれてるし、何より……かなりこまってるみたいだぞ」

察してくれたのはぱつとしない白い学生服を着た少年だった。名前は北郷一刀というらしい。関羽ちゃんが気絶してる間に軽く自己紹介を済ませたのだ。

「でも、愛紗ちゃんが本当に迷惑をかけました、私からもすみませ
ん」

と謝ってくるのは天然そう少女、劉備。そして、

「全く、愛紗は慌てすぎなのだ」

といっているちびっこは張飛。はっきりいって困惑しているのは状況ではなく目の前にいる人たちだ。少女たちは間違いないくあの英雄だ。時系列はいまいちはつきりしないが恐らく黄巾の乱辺りだろう。そして北郷一刀を見て確信した。ここは間違いなく世界が違々と。なぜなら彼と私たちも未来から来ているからだ。にもかかわらず話が合わない。かれの世界にはハーウェイ財団が存在しないからだ。ハーウェイはかなり昔から存在しているはずなのである。名前すら聞いたことがないと言っにはハーウェイは大きすぎる。むしろ知らずに生きていくのは不可能といってもよい。

「……わかったところでどうしようもないんだけど」

ぼそりとくちにだしていつてしまった。

関羽ちゃんは立ち直ったようだ。

「それにしても、お二人の使ったあの技、一体あれはなんなのですか？」

あれか、ちなみに今は宿の部屋にいるので聞かれる心配は少ない。あまり大っぴらには言わない方がよいだろう。とはいえ目の前の人たちには説明した方がよいだろう。

「えーと、まず私が使ったのはガンドっていう魔術なの、魔術ってわかる？」

「？道術とは違うのですか？」

「そつちの道術がどんな物なのかは知らないけど、私のはあくまでも魔力を……あーなんと言うか気でいいのかなそれを使ってさまざまな術を使うの」

あまりうまく説明できてない気もするけどおおむねこんな感じだろう。

「へーすごい」と劉備ちゃんと。

「先程私のはといましたでしたよね、お連れの方は違うのですか？」

むう、するどい。

「ここからは私が説明しますね」と、タマモ。

「わたしのは呪術になりますね。とはいっても念じれば相手を殺せるなんてものではなくさつきみたく炎をだしたりするものですね」と、タマモ。本来はもっと多岐にわたる術が使えるのだが、サーヴアントのクラスの都合上あまり使えないのだ。昼間に盗賊相手に無双出来たのは奇襲だったからであり真つ向正面気って戦えば負けはしなくてもかなりの苦戦を強いられただろう。

そんなことを考えていると、劉備ちゃんが一步前髪出てきた。

「あの、お二人はこの村を見てどうおもいました？」

そんなことを聞いてきた。どう、か。正直平穩とは言いがたいだろう。よくみればわかるのだがこの村には戦えるものが少なすぎる。いないと言ってもいいほどに。さらに、村の裏にあった墓はどう見積もっても半年もたっていないものばかりだ。そこまで揃えばおおよその想像はできる。

「少なくとも、平和とはとても言えませんね」

タマモが代弁する。乱世、もしくはその直前に増えるこのような場所。ムーンセルで見た戦争の知識はあったものの改めてみると道にもやりきれない。

「今、世の中にはこんな風景がたくさんあります。力が無い、ただそれだけで普通に暮らすことすらままならない」

「だからこそ我らは立ち上がるうとしたのです」

「こんな悲しい世の中続けてはいけないのだ」

「だから、力を貸してほしい。身勝手なのはわかってる。けど俺たちにはもつと力が必要なんだ」

そうして四人が膝をついて頼んできた。…確かに力を貸すのはいいけれど一つ聞いておきたいことがある。

「ねえ一つ聞いて良い？」

「なんですか？」

「あなたたちは何を求めているの？」

「みんなが笑って暮らせる世の中です」

そこには、強い意思を宿した瞳があった。

「じゃあ、それがある意味奇跡に近い世界だつて理解してる？」

そう奇跡だ。力を使っていくことが前提ならば大小様々な恨みをかっついていくことになる。そして、その恨んでる人たちは笑えるのか？ 幸せを感じられるのか？ 答えが聞きたい。

「…わかっています。私たちは矛盾してるって。でもやっぱり見ているだけなんてできないんです。矛盾していても私たちは行動したいんです」

…危ういなあ、ある意味トワイヌにそっくりだ。私は彼を否定し

た。でもそれは言葉の上でのみだ。結局

何の証明にもなっていない。そして目の前にいるのは理想に燃える少女。彼女はどれ程後悔しようとも歩みは止めまい。その姿は美しいだろう。だから信頼できる仲間ができる。でもこのままなら確実に理想に溺れてしまう。しかし、いやだからこそ私は彼女を助けたと思ったのだろう。傲慢だとは思う、けれど理想に準じてしまった人を知るものとして放つてはおけない。

「ご主人様はそれでよろしいのですか？」

タマモが問うてきた、口に出したのは警告もかねたのだろう。ここからは修羅の道だと。

「劉備、私たちは貴女についていく、だから一つだけ約束して」

「へ？何ですか？」

呆けたように劉備ちゃんが聞き返してきた。

「決して、一人で抱え込まないでね。貴女の行く道は私達の道でもあるのだから」

言葉とともに私は手を差し出した。その手を少し戸惑いながらも劉備はしっかりと握り返してくれた。

act・3 shake hand(後書き)

これからも亀更新ですが最後まで続けていくつもりです。ご意見、ご感想お待ちしております。

act・4 under moon(前書き)

本当にお久しぶりです。ようやく更新できました。今回独自設定と急展開入ります。

夜空を見る。今日は満月で、もしかすると私のいた世界が見えるかもしれないから。戻れる訳がないのに、今ここにいることが奇跡なのに。もう一度、会いたい友人がいる。もう一度、謝りたい友人がいる。だから、会いたい。けれどもそれは無理な話。だからこそ、あとのことを私に託したのだ。もう会えないから、もう謝れないから。だからせめて半分くらいは済ませたかった。ただ、月を見てみると、なんだか私の言葉が届くような気がする。だから、月を見る。ただささやかな願いを載せて。

「眠れないのか？」

ぼんやりしていたら一刀君が話しかけてきた。

「ん、そんなところかな」

「なんだか、安っぽいラブコメみたいだ。ここからフラグでも立てるんだろうか。」

「…あのさ、君らは別の世界から来たんだよな」

「間違いなくね、時間軸が違っつて言うべきかな。『違う』んじやなくて『ずれて』いるのほぅが正しい」

平行世界、同じようどこかが決定的に違う世界。第二魔法の再現である。魔術師^{メイガス}が涙しそうな話である。

「ほんと、信じられないよなあ。俺なんてそんな神秘のかけらもないところから来たんだぜ」

「それはわかんないよ、単に秘匿されてたって可能性もあるし」

普通の人は知らないもんである。

「げ、じゃあ知らないところで誰かが生贄にされてたりとかすんのか？」

「知らないわよ、っていうかそんな悪趣味なのめったにないから」
「っていうか、勘弁してくれ。そんな変態まじしんまはあの二人だけにしてくれ。」

「…ま、それはおいといて、何か話したいことがあるんじゃないの？」

「ああ、やつぱわかる？」

うん、話したいけど話しにくい、私もよくそうだったから。

「一個気になることがあるんだ」

「気になること？」

「俺たちは初対面、だよな」

「はあ？なにそれ、ナンパ？」

まさかのナンパ発言か？

「違う違う、そうじゃないんだ。なんていうか、説明しにくいんだけど。おれ、桃花たちにあったことがあるみたいなんだ」

「どういうこと？」

声音から冗談の類ではない。彼が言っているのはつまり、この世界にきたことがある、そう言っているのだ。

「俺も、よくわからないんだ。あの三人と初めて会ったとき、久しぶりだっただけ感じていたんだよ。そこまでならデジャヴで済むんだよ。でも、問題はそのあとなんだ」

そのあとの話は、正直気味が悪いものだった。そのあと彼は演技でもなんでもなく。初対面のように振る舞い、彼女らの思いに共感しそして兄妹の契を結んだ。違和感を胸に抱えたまま。なぜか思考が違和感を解決する方向に向かないのだ。

「でも、君らにあってこれはおかしいって再確認出来たんだ。魔術師のきみなら何かわかるんじゃないかって思ってた」

どういうことだ？これはまるで世界の…

「修正力ってやつよん」

突如ダンディなオカマ声が聞こえた。シリアスが粉々だ。

「のわあ！！誰だあんた！！」

「なによ、人のことを化け物見たく言って」

いや、化け物、いなバケモノだ。目の前にはふんどし一丁の筋肉だるまが立っていた。…シナを作って。

「どちら様？」

「私は旅の踊り子貂蟬よん」

「んなつ！！あの美女の？」

「そうよん」

「ありえないわ」

「いやひどくないか、それ」

ちがう、本当に居るはずがないのだ。

「貂蟬は、架空の人物なのよ。居るはずがないの」

「え、それってどういうことだよ」

「ここは、三国志の時代のひとつの分岐、であるならば架空の存在がいる訳がないのよ」

「いやでも、平行世界って可能性の世界だろ」

「だったら、ますますありえないわね。平行世界ってもなんでもアリじゃないの。初めから『居ない』って定義された人物がいる世界には飛びにくいのよ」

「でも、ありえないってわけじゃないよな」

「あなたならありえたけど、私の場合『貂蟬は架空の人物』って知ってるの。そういう人は狙ってそこに行こうとしない限り『貂蟬は実在の人物』って世界にはたどり着かないわ」

「じゃあ、こいつは一体」

「ふん、ようやくチャンスが訪れたようね」

「チャンス？」

「そう、全てを始めるチャンスが」

「どういうことだよ」

「まずは、先に私の正体を言っておくわね。私は外史の管理人。今のあなたなら理解できるはずよ」

ふと、一刀の方を見ると頭を抱えていた。

「っ！！大丈夫!？」

「…ああ、大丈夫だ。全部、思い出したよ」

その顔は、今までの甘さの残る少年ではなかった。まるで、英霊を前にしたような。そんな雰囲気を出していた。

「そうか、フミノのおかげだ。俺はようやくこの輪から抜け出せる」
「油断するのはまだ早くつてよ」

話についていけない。

「ちょっと説明してよ」

「ああ、まずこの世界外史なんだが。実はもう途方もない回数この三国志を繰り返しているんだ」

「…はい？」

「目的はわかんないし、誰がやってるのかもわかんねえ。ただ、この世界は三国志の世界をずっと繰り返しているんだ」

「そして、北郷一刀はその世界の起点にして終点なのよ」
まさか、さつき一刀が言っていた違和感って。

「そう、俺の魂の記憶だったんだよ」

「本来、魂に記憶は宿らないわ。けれどもなんども滅びと再生を繰り返すうちに刻みつけられたのよ」

「そうだ、いつかみんなを開放するために」

「でも、私たち管理人もどうにかそれを終わらせようとしたわ。けれどもどんなことをしても最悪の滅びで終わってしまうの」
「最悪って？」

「全てが死に絶えるの、そしてその死を持って新たな外史を始めているのよ」

「もしかして、あなたは」

「本来は管理人ではなく、観測者よ。でも、世界に干渉するために外資の管理人貂蝉である必要があったの」

「おそらく、フミノは俺を見て嫌悪感を抱いたはずだ」
そのとおりだ。

「あれも、俺がこの世界の人物なのに、違う世界の人間のフリをし

ていた。そのせいで第三者から見ればとんでもなくずれた行為だったんだ」

そうか、だから気持ち悪くてついタマモの軽口に乗ったんだ。自分に説明をつけるため。」

「それで、これからどうするの?」

「決まってる、今度こそこの輪を打ち破る」

「どうやって?」

「実際のところ結末はいつも同じなんだ」

「どうなるの?」

「赤壁の戦いのあと、五胡の軍勢に滅ぼされる」

「回避は出来ないの?」

「できないわね、どうやらそいつら世界の出した軍勢みたいなの。」

あなたのところでは言うサーヴァントに近いものね」

「そいつらはただ命を奪い尽くすだけの軍勢だ。おかげで、何度撃退しても交渉できないし、策もほとんど通じねえ」

「幸いなのはそれを出すせいで、世界は半分休眠状態に入ってるってことくらいね」

「じゃあ」

「当分修正力は働かないわ」

「このこと、みんなに話すの?」

「いや、話してみても分かったけど気づいてないみたいだからまだ話さない。下手に混乱させるのもまずいし。下手すると五胡の軍勢が来るのが早まるかもしれない」

「五胡が来る時期って一定なの?」

「ああ、さつき赤壁の戦いの後これは消して変わらない」

「じゃあ」

「赤壁までは、大筋では歴史をなぞる、ただ」

「その間に仕込みをして送ってことね」

「そうだ、さしあたってはフミノ」

「なに?」

「魔術師をできるだけ増やして欲しい」

「でも、私ができることってそんなに多くはないわよ」

「いや、魔術って力が存在するだけでもありがたいんだ」

「なぜ？」

「五胡に毎回滅ぼされる原因には相手がいっまでも湧いてくるって点だ。これのせいで兵力はもとより、士気がダダ下がりになってジリ貧になる。それにあるって分かればそこから新しい魔術が作れるかもしれないねえ」

「なるほど」

「わたしは、ほかの奴らに声をかけるわ。今回ならおそらく左慈と于吉も協力させることが可能なはずよ」

「それはありがたいな」

「一刀どうするの？」

「しばらくは、天の御使いをやる。少し賭けになるけど今までの失敗をもとにして行動するつもりだ」

「どうして賭けになるの？」

「そのせいで何が起こるか分からないからな。今までは『一般人の一刀』でしか関わってない。ただその全てにおいて詰みになってたんだ。だから最後の状況が少しでもよいものになるようにする」

「おそらくけど、そこまで大幅に変わればさすがに修正力が目覚めるんじゃないの」

「その点は心配いらぬ。どうやら、敵は五胡による滅びを望んでいるんだ。だから」

「少なくとも滅ぼされる心配はないと」

「まあ、詰みの状況になるように引張られる可能性は高いけどな」
「とりあえずは今までどうりってことなのかしら」

「ああ、本格的に動くのは反董卓連合の時だと俺は思う」
「どうして？」

「あの時こそが最初のターニングポイントなんだ」

「本格的な乱世の始まりってことね」

「そうだ、そこで大きな変更を加える」
「そうなれば、後戻りはできないわね」
「その時にみんなに伝えようと思う」
「真実を？」
「そうだ、恨まれるかもしれないけど。あの時のみんななら受け入れてもらえると思うんだ」
「まだわかんないよ？」
「いや、おそらく違和感を感じ始めてるはずなんだ。反董卓連合の時に大きな変更を加えられればそれが決定的になる」
「一応、タマモには話しくわよ。どうせバレるし」
「むしろそうして欲しい。呪術も教えてもらいたいしな」
「あー、それは無理かも」
「なんで？」
「彼女、使いたがらないのよ。その力でひどい目にあつたことがあるから」
「それは、なんとか説得してくれ」
「わかつたわ、ただ使える人間がいるかわかんないけどね。魔術以上には使い手は少ないと思うから」
「そのへんはわかつてる」
「そろそろ、私は御暇するわ。あまり重要人物が固まってる让世界を刺激しかねないし」
「そうだな、じゃああとは頼んだ」
「また逢いましょう」
そう言つて筋肉たるまはふつと闇に溶けた。
「じゃあ俺たちもそろそろ宿に戻ろうか」
「ほかの人たちは？」
「寝てるよ、いろいろあつて疲れたみたいだ」
「じゃあ、また明日」
「ああ」

私たちは世界への反乱を始める。たとえ無謀であろうとも

act・4 under moon(後書き)

平行世界云々に関しては独自解釈です。ご意見質問まっています

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6992u/>

EXTRA History(FATE EXTRA+真恋姫 無双)

2012年1月2日02時49分発行